

■ 解答・解説

問1 「どの帝の御代であつたらうか」。「にか」のあとに「ありけむ（あらむ）」などが省略されており、「いづれの御時に（か ありけむ）」＝「どの帝の御代であつたらうか」とぼかした言い方になっています。

問2 読み＝「おおんとき（おおむとき）。意味＝「(帝の) 御代・御治世」。「御時」は天皇が在位している時代を指す尊敬表現で、「いづれの御時にか」は「どの帝の御代であつたらうか」と、わざとぼかして物語を語り出す有名な書き出しです。

問3 「さぶらひ」は謙讓語（「さぶらふ＝お仕えする・伺候する」）。作者から帝（天皇）への敬意を表します。女御・更衣が「お仕え申し上げていた」相手は帝なので、お仕えされる帝を高める謙讓語です。

問4 「たまひ」は尊敬語（補助動詞「たまふ」）。作者から、お仕えしている女御・更衣たちへの敬意を表します。「さぶらひたまひける」で、伺候する女御・更衣の動作を高めています。（※問3の「さぶらひ」は帝へ、問4の「たまひ」は女御・更衣へと、敬意の対象が異なる点が頻出ポイントです。）

問5 「あらぬ」の「ぬ」は、打消の助動詞「ず」の連体形です。ラ変動詞「あり」の未然形「あら」に付き、「あらぬ（際）」＝「～ではない（身分）」となります。（完了の「ぬ」と紛らわしいですが、ここは打消です。）

問6 「やむごとなき」＝「(家柄や身分が) 高貴だ・尊い」。ここは「いとやむごとなき際にはあらぬが」で「たいして高貴な身分（の家柄）ではないが」の意です。

問7 桐壺更衣は、皇后や有力な女御のような飛び抜けて高い家柄の出ではなかった女性です。「いとやむごとなき際にはあらぬ」＝「たいして高貴な身分ではない」とあり、中流貴族の出身でありながら帝の寵愛を一身に受けた点に、後の悲劇の伏線があります。

問8 「ありけり」の「けり」＝過去の助動詞「けり」（～た。ここは語り手が伝え聞いた事柄を述べる、物語特有の過去）。「ありけむ」の「けむ」＝過去推量の助動詞「けむ」（～たのだろう）。「恨みを負ふ積もりにやありけむ」で「(人の) 恨みを買い重ねたためであろうか」と、過去の事情を推量しています。

問9 「時めき」＝「(帝の) ご寵愛を受けて栄える・もてはやされる」。「すぐれて時めきたまふ」で「ずばぬけて帝のご寵愛を受けていらっしゃる」という意味になります。

問10 ずばぬけて帝の寵愛を受けたのは桐壺更衣です。本来なら最高位の女御こそが寵愛を受けてしかるべきところ、「高い身分ではない（やむごとなき際にはあらぬ）」更衣が「すぐれて時めき（ずばぬけて寵愛され）」たと対比的に書くことで、身分の低さと寵愛の厚さのアンバランスが際立ち、周囲の反発を招く原因として強調されています。

問11 「(その更衣を) 心外で目ざわりな者として、見下したり ねたんだりなさる」。「めざまし」＝「心外で目ざわりだ・気に入くない」、「おとしむ」＝「見下す」、「そねむ」＝「ねたむ」です。

問12 「おとしめ そねみたまふ」の「たまふ」は尊敬語（補助動詞）。作者から、「我はと思ひ上がりたまへる御方々」（身分の高い女御・更衣たち）への敬意を表します。見下し ねたむという動作の主が高貴な女

御・更衣なので、その動作を高めています。

問13 「めざまし」＝「(心外で) 目ざわりだ・気にくわない」。ここでは、身分が高くないのに帝の寵愛を独占する更衣を、他の女御・更衣たちが「心外で目に余る存在」と感じていることを表します。(現代語の「目覚ましい＝すばらしい」とは意味が異なる点に注意。)

問14 「篤し(あつし)」＝「病気が重い・病気がちだ」。「いと篤しくなりゆき」で「(更衣は) たいそう病気がちになっていき」の意味です。心労が重なって更衣の体が弱っていく様子を表します。

問15 「なんとなく心細そうで、実家に下がりがちであるのを」。「もの心細げなり」＝「なんとなく心細い様子だ」、「里がち」＝「(宮中ではなく) 実家に下がっていることが多い」の意味です。

問16 周囲の嫉妬や心労(「人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積もり」)から更衣はたいそう病気がちになり、心細げに実家へ下がるが多くなりました(里がち)。しかし帝はそれを疎むどころか、「いよいよ飽かず(ますます物足りなく感じて)」「あはれなるものに思ほして(いとしい者とお思いになって)」、寵愛がいつそう深まっていきます。世間の非難さえ気につけないほどの寵愛ぶりでした。

問17 「(帝は) ますます物足りなく、いとしい者とお思いになって」。「飽かず」＝「満ち足りない・物足りない」、「あはれなり」＝「いとしい・しみじみと心ひかれる」、「思ほす」＝「お思いになる」(「思ふ」の尊敬語)です。

問18 「世間の人々の非難をも気がねなさることがおできにならず」。「そしり」＝「非難・悪口」、「えへず」＝「～できない」、「憚る」＝「遠慮する・気がねする」。帝が世間の非難さえ気にせず更衣を寵愛したことを述べています。

問19 「せたまは」は、尊敬の助動詞「す」＋尊敬の補助動詞「たまふ」を重ねた二重敬語(最高敬語)と呼ばれる言い方です。作者から帝への敬意を表し、最も高い相手(ここでは帝)に用いられます。「え憚らせたまはず」で「(帝は) 遠慮なさることもおできにならず」の意です。

問20 「なりぬべき」の「ぬ」＝完了(強意)の助動詞「ぬ」の終止形、「べき」＝当然・推量の助動詞「べし」の連体形。口語訳は「きっと(世の)例にもなってしまういな」。「ぬ+べし」で「きっと～してしまうにちがいない」という強い推量を表します。

問21 「思ほす」は「思ふ」の尊敬語(「お思いになる」)。作者から帝への敬意を表します。更衣をいとしくお思いになる動作の主が帝なので、帝を高めています。

問22 桐壺更衣は、たいてい高い身分ではないのに帝の寵愛を独占したため、他の女性たちの嫉妬と反感を買いました。嫉妬したのは、まず「(はじめより) 我はと思ひ上がりたまへる御方々」(＝最初から自分こそはと自負していた、身分の高い女御・更衣たち)で、彼女たちは更衣を「めざましきもの(目ざわりな者)」として見下しねたみました。さらに「それより下臈の更衣たち」(更衣と同程度かそれ以下の女性たち)も「ましてやすからず(いつそう心穏やかでない)」とあり、上下を問わず反感が広がったことが描かれています。

問23 (A) 作者＝紫式部。(B) 成立＝平安時代(中期、十一世紀初め頃)。(C) 全五十四帖(54帖)からなる長編物語。光源氏とその子孫を中心に描かれ、日本古典文学を代表する作品です。

問24 このような種類の物語を作り物語（つくりものがたり）といいます。空想や伝説をもとに創作された物語で、その系譜で「現存する日本最古の物語（物語の祖（おや）と称される作品）」は『竹取物語』です。『源氏物語』は、この作り物語の流れと、和歌を中心とする歌物語（『伊勢物語』など）の流れを統合し、物語文学を大成した作品と位置づけられます。
